

常照

第 854 号

曇鸞和尚伝

(どんらんかしょうでん)

親鸞聖人の高僧和讃(以下〔高〕)
一一七首中、最も多い三十四首が、
浄土七高僧中の第三祖曇鸞和尚
(どんらんかしょう)です。和尚
を真宗では「かしょう」、他の宗
では「わじょう」とも読みます。
なお猫を虐待したのは山寺の和尚
(おししょう)です。その生涯をた
どつてみたいと思います。

「尊号真像銘文」に東本願寺出版

『真宗聖典(第二版)』

以下〔聖典〕六三六頁

西本願寺『浄土真宗聖典(注釈版)』

以下〔注釈版〕六五三頁

釈の迦才(かさい)の「浄土論
一卷下」大正蔵四十七―九十七下
を引用して「釈の曇鸞法師は并州
の汶水県の人なり。魏の末、高齊
の初、猶在(いま)しき。神智高
遠にして三国に知聞す。洞(あき)
らかに衆経を曉(さと)るること、
独り人外に出でたり。梁国の天子
蕭王、恒に北に向かいて鸞菩薩と
礼す。『往生論』を注解して両卷
に裁(ことわ)り成す。」

これを説明して并州(へいしゅう)
う)、汶水は国と所の名前です。
和尚の知恵がすぐれて神智高遠と

言われる、三国とは、魏と斉と梁などと展開されていますが、これだけではよく分かりません。他の資料を当たってみましょう。この「浄土論」の引用されていない後半部分と、源空の浄土五祖伝（曇鸞）『浄土全書第九卷』を他の解説書などを参考にしながら読み解いていこうと思います

曇鸞和尚は孝文帝の承明元年（四七六年）雁門（山西省）の生まれ、生家は五台山（峨眉山、普陀山と並んで中国三大霊山の一つ）に近く、幼い頃にその山に上り出家しました。非常に知恵すぐれ、『中論』『十二門論』『百論』『大智度論』を学び、四論宗の道を究めます。さらに『大集経』の注釈書を作ろうとしますが、大部（六

十卷）の上、難解な經典のため作業は困難をきわめ、ついには病に倒れます。そこでこの注釈という大作業を成し遂げるには健康長寿でなければならぬと、不老不死の仙人になる道を求め、江南に道教の権威、陶隱居（陶弘景）を訪ねます。そこで仙術を学び、ついに『衆晋儀』



十巻を授かります。それをもつて江南から洛陽に立ち寄ったところ、三蔵法師（經典、注釈、仏教生活規律の三つに詳しい）菩提流支（ぼだいりし）に出会います。そこで仏教全般に通じている

法師に「仏教では、この仙經に勝る教えがありますか」と問います。法師はそれに答えて『觀無量壽經』を授け、阿彌陀仏の本願他力を説いた經典に勝るものはないと諭します。深く感銘を受けた和尚は、『衆晋儀』を焼き捨て浄土の教えに帰依することになったとされています。

宗祖はこのことを

本師曇鸞和尚は

菩提流支のおしへにて

仙經ながくやきすて、

浄土にふかく帰せしめき

〔高〕四―一

と讃えられています。

〔聖典〕五九二頁

〔注釈版〕五八二頁

曇鸞和尚は徳が高く、魏の孝静帝は和尚を訪ねて、十方の仏国がすべて清浄な国土なのに、なぜ阿彌陀如来の西方浄土へのみ往生を願うかと問います。〔高〕四―三
その答えは

鸞師こたへてのたまはく

わが身は智慧あさくして

いまだ地位にいらざれば

念力ひとしくおよばれず

〔高〕四―四

ここで鸞師とは曇鸞和尚、地位とは他の仏国土に至ることのできる立場、念力とはそれを見通せる能力です。宗祖は左訓（さくくん）で「不退の位に至らずとなり」、「おもふ力、余の浄土にはかなはずと

なり」と示されています。感銘を
 けた帝は和尚を神鸞と敬い（左訓
 では、ほめまいらすところなり。
 すべてめでたうましますといふこ
 ころなり）并州の大巖寺に住まわ
 せ、その後玄中寺、遥山寺にうつ
 ります。
 〔高〕五―一&二
 そして

六十有七ときいたり

浄土の往生とげたまふ

そのとき靈瑞不思議にて

一切道俗帰敬しき

〔高〕五―三

臨終を迎えられます。

帝は敬意重く、すぐに勅宣を下
 して汶州汶西秦陵（今の山西省平
 遥）に廟を建てました。

〔高〕五―四

三月の常例布教（ご法話）のご案内

○前期 三月七日（金）〜十一日（火）

北海道教区空知北組円満寺

講師 金龍 之哉 師

○後期 三月十三日（木）〜十六日（日）

山陰教区三瓶組専勝寺

講師 金盛 徳照 師

○春季彼岸会布教

三月十八日（火）〜二十日（木）

北海道教区十勝組真浄寺

講師 永田 弘彰 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時（法要終了後）〜

午後三時半

◎浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂
 きます。どうぞ誘い合わせいただき、ご聴聞に来
 院ください。席の間隔を保ち、換気実施の上、お待
 ちしております。
 尚、三月二十日（木）は春季彼岸会の御中日のため
 月忌参詣はお休みさせて頂きます。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (011-4) 2211074
 FAX (011-4) 2911408
 テレホン法話 (011-4) 2711616